

現代に於ける世界的偉人としての
エデントン教授とジーンズ博士

「文藝春秋」の本年三月號第 15 頁に千葉春村氏が書いてゐる記事の中に次の如きものがある。

(前略)

ロンドンの新聞記者が米國のコロムビア大學總長ニコラス・ムーレー・パットラー博士と會見した際、同博士がその談話中「現代には眞に偉人さもいふべき人物は一人も存在しない」と喝破したのに因を發して居るのである。

同博士曰く「これまで過去二千年の間、未だ曾て何れの時代に於ても、一人か二人、偉人さもいふべき大詩人、大哲學者若しくは大天才の現はれない時代はなかつた。だが現代には偉人らしい偉人は一人もない。世界の何れの國を見渡しても、遺憾ながら只の一人も見當らぬ」云。

これに對して、第一に反對の聲を擧げたのは、ブリテツシ・アツソシエーションの前會頭サー・オリヴァー・ロツツ氏である。

「私はムーレー博士とは大に意見を異にする者である。現在生存してゐる者の中に、寧ろより偉い人が現代の天文學者中に存在する。例へばエテングトン教授の如き、ホツプウッド・ツヤンズ博士の如き即ちそれである。現代には偉人は只の一人もない？ いやいや私はその説には賛成し兼ねる」云。

エデントン、ジーンズ兩氏の名は本誌にも以前から度々紹介した所であるから、今更こゝに記すまでも無いが、しかし、此の二人が實に現代の總てを代表する世界的偉人であるさといふロヂ翁の心醉ぶりには驚かされるやうな氣もする。しかし、何時の時代、何れの國に於いても、現に目前に居る偉人を偉人さ見るこゝが困難であつて、多くは其の人が死んでから後に、始めて「彼れは世界的偉人であつた！」なきさ感じ、崇拜するのが普通である。之れ畢竟するに吾人が、眞に偉人さする人を見る眼が無いのによる。——こうして考へて見るに、今の英國にロヂ翁のやうな大先輩があつて、其の同時代人や後輩の中にも、實に「世界的偉人がゐる」さといふ眼を持つてゐるのは羨ましき限りである。古人の言の如く、眞に「千里之馬」は良い伯樂によつてのみ見出されるのだ。して見るに、「千里之馬」も欲しいけれど、其れ共、眞に良い伯樂も欲しいものである。

因みに、ロヂ翁に推擧された二人のうち、エデントン教授は、本年僅かに四十五歳の青年學者であつて、かつてはグリニチ天文臺の首席助手で

あつたが、1914年 R. S. ボールの後を繼いで英國ケンブリヂ大學の講座擔任教授兼同大學天文臺長に擧げられた。グリニチ時代にはダイソン臺長を助けて、恒星の運動なごの統計研究をし、二大星流説のために奮闘した。ケンブリヂ大學に移つてから、先づアインシュタイン流の相對原理の理論と實際とを研究し、1919年には親しくアフリカの皆既日食觀測に出張して、相對原理の最初の確證を齎らし、實にアインシュタインの名を世界的にした張本人である。最近は、シヴルツシルドの輻射平衡論を進展させて、恒星の内部構造に關する破天荒の研究を發表し、世界を驚かしつゝある。氏の著書として有名なものは

Stellar Movements and the Structure of the Universe, (1910),
 Mathematical Theory of Relativity, (1923),
 Space, Time and Gravitation, (1920),
 Interior of the Star, (1927),
 Stars and Atoms, (1928).

ホブド・ハロルド・ジーンズ博士は、エデントン教授より四つ五つ年長者であるが、元來此の人は數理物理學者として、可なり以前からガス體の理論や電氣磁氣學の著書等がある。最近十數年間、天體進化論の研究に手をつけ、先つヤコビ、ポアンカレ等の回轉論や、ダーキンの潮汐論を檢討した後、チエンバレン・ムルトン兩氏の微遊星説を發展させ、それにラブラス流の星雲進化論を取り入れて、遂には今世紀に於ける宇宙進化論を大成し、更に、常に前記エデントン教授との間に花々しい論戦をつゞけつゝ天體進化の理論を獨自的に開拓して、遂には「液體恒星論」にまで到着したのは一二年前であつた。——1925年から1927年まではローヤル天文學會の會長をつとめたこともあるが、元來、富豪の學者者であつて、官職や公職には就かず、ドルキングの寒村に悠々自適して日を送つてゐる。著書の中で有名なものは

Dynamical Theory of Gases, (1904),
 Mathematical Theory of Electricity and Magnetism, (1908),
 Problems of Cosmogony and the Stellar Dynamics, (1919),
 Astronomy and Cosmogony, (1928).